

福島県県外避難者帰還・生活再建支援補助金

事業評価調書

団体名 特定非営利活動法人フュージョン社会力創造パートナーズ

<p>事業名</p>	<p>「いばらき」を知る避難者主体の交流会事業、及び戸別訪問事業</p>
<p>事業の内容</p> <p>事業の目的</p>	<p>【事業内容】 以下の2つの事業を柱とする。</p> <p>1. 「いばらき」を知る避難者主体の交流会事業 ・避難先である「いばらき」の魅力スポットを知るための交流会を3回、避難者主体で実施する。家族向けに「いばらきの美味しいを食べる」交流会として、秋のぶどう狩り交流会、春のイチゴ狩り交流会を2回行う。また、稲敷地区のまち歩き交流会第二弾を阿見町で行う。 ・今年度も、避難者が主体となった交流会として、地元民政委員や支援者と連携しながら実施する。 ・交流会参加費用は、一部を参加者負担とする。</p> <p>2. 戸別訪問事業 ・平成30年6月1日から平成31年3月31日まで適宜実施する。 ・茨城県つくば市、旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、阿見町、牛久市）等の茨城県南地域への避難者を対象とし、延40世帯の訪問活動を行う。 ・その際には、福島県・福島県内各町の復興支援員・各自治体・教育委員会・社会福祉協議会・民政委員・茨城県内への避難者・支援者ネットワーク「ふうあいねっと」・避難者自助グループなど、多様な方々と連携しながら、効果的な戸別訪問を行う。</p> <p>上記の事業を効果的に実施するために、ふうあいねっとや福島県内支援団体、また、他県の避難者支援ネットワークの会合にも参加し、情報交換を行っていく。</p> <p>【事業目的・必要性】 1. 「いばらき」を知る避難者主体の交流会事業 ・避難先での移住を決定された方がほとんどの中で、「いばらき」の魅力スポットを知ること、地域の良さを感じてもらおう。また、茨城県の美味しい食べ物を通して相互に交流する機会とする。 ・本NPOは、当事者たる発起人を、あくまでも黒子としてサポートすることで、当事者の主体性を引出し、自ら課題解決に向けて連携や意見交換できる基盤作りをするものとする。 ・当初都心周辺に避難した方が、茨城県への移動が少なからず見られるため、そのような方々の受け皿として、交流会を開催していく。</p> <p>2. 戸別訪問事業 ・震災後7年が経過し、避難者のニーズも個別の実情に応じて多様に変化している中で、今後も、福島県に戻る、戻らない、決めかねている、どの選択をされる方の意向も尊重した中で、より個別の実情に応じた専門機関や地域への繋ぎなど、ニーズが表面化しにくい、声が挙げにくい、体調が万全でない、などの環境に置かれている避難者の生活をサポートし、パーソナルケアを行っていく。 ・つくば市以外の県南地域の自治体は、本NPOが5年前から旧稲敷郡（美浦村、稲敷市、牛久市、阿見町）で、一部民生委員と連携しながら交流会や戸別訪問活動に力を入れ始めたものの、つくば市ほどの支援は受けられていない。そこで、我々支援者側が手を引いた後も、継続的に、地域での見守り体制づくりが行われるきっかけとなるよう、避難者と地域、また避難者同士のセーフティネット作りをしていくことを目的とする。</p>
<p>事業実施内容</p>	<p>1. 平成30年6月1日～平成31年3月31日：戸別訪問活動 ●訪問延51世帯（実質20世帯。訪問先：つくば市、牛久市、土浦市、阿見町、つくばみらい市、水戸市、日立市への避難者） ●戸別訪問実働人数：4名</p> <p>2. 平成30年9月30日：ぶどう狩り交流会 ●内容：「いばらきの美味しいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催 ●場所：桜井ぶどう園（かすみがうら市） ●参加者：24名（避難者17名、支援者7名、うち子供7名） ●支援者参加者：NPOフュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー</p>



3. 平成 31 年 2 月 16 日：イチゴ狩り交流会
(帰還者 1 名による協力)

- 内容：「いばらきのおいしいを食べる」ことで茨城県の理解を深め、おいしい食を通して相互に交流を図ることを目的として開催
- 場所：つくばねファーム、大穂交流センター（つくば市）
- 参加者：27 名（避難者 19 名、支援者 8 名、うち子供 7 名）
- 支援者参加者：NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、ふうあいねっとメンバー



4. 平成 31 年 2 月 20 日：阿見町まち歩き交流会（第 5 回稲敷地区交流会）
(避難者 3 名による協力)

- 内容：5 回目の稲敷、美浦、阿見、牛久、土浦地区の交流会
- 場所：ツムラ漢方記念館、阿見プレミアムアウトレット、予科練記念館（阿見町）
- 参加者：12 名（避難者 9 名、支援者 3 名）
- 支援者参加者：ふうあい県南メンバー、NPO フェュージョン社会力創造パートナーズメンバー、地域協力者 など



事業達成度

本事業の交流会の特徴は、多くの避難者がこのまま茨城県に住み続けられることに考慮し、茨城県内の名所を一緒に見て回ったり、美味しい食べ物を一緒に満喫することで、茨城県の良さを知ってもらい、かつ、その体験を通して地域住民、或いは避難者同士の仲間作りをしてもらうことにある。また、つくば市に比べて支援が行き届きにくい旧稲敷郡での支援を続けていくことにある。その中で、以下の点が、達成度として挙げられる。

1. 避難されている当事者が主体となった交流会事業

阿見町のまち歩き交流会では、避難者当事者グループの「ふうあい県南の会」に広報や事前準備、当日運営に協力してもらうことで、当事者が積極的に関わる会として進展させることができた。

また、いちご狩り交流会では、帰還者が運営に関わり、広報や当日運営を中心に役

	<p>割を担うことで、当事者視点の会とすることができた。</p> <p>2. 旧稲敷郡での避難者同士と地域との繋がり創出 本事業では、つくば市と比べて支援が手薄になりがちで、旧稲敷郡（牛久市、阿見町、美浦村、稲敷市）に避難されている方の戸別訪問活動や交流会を通して、地元民政委員などキーパーソンとの連携の下、避難者同士、また、避難者と地域との繋がり作りを着実にすることができた。交流会では、避難者同士が声を掛け合って参加申し込みをする様子も伺うことができた。 今後も、より多くの参加者が期待できるまち歩き型や茨城の美味しい果物などを食べる交流会と訪問活動を組み合わせて、更なるセーフティネット作りを寄与していく。</p> <p>3. 避難者個別のニーズに応じたパーソナルケア（戸別訪問） 避難者は避難先を中心に徐々に住む家も決まり、表面的には落ち着いてきているように感じられる。しかし、度重なる訪問活動から、まだ多くの方が、心身の不調や地域からの孤立、人間不信など、様々な問題を抱えていることが分かった。そして当 NPO の木目細かな訪問が避難者の楽しみや励みになっていることも伺えた。多くの方の訪問はできないが、これまでに良い関係を作り上げてきた方とは、地道ではあるが継続して寄り添った関わりを持つことができた。</p> <p>4. 茨城県の地域情報の発信 茨城県内の地域のまち歩きを行ったり、果物狩りなど、美味しい食べ物を食べることで、避難先である茨城県の魅力について身を持って体感してもらうことができた。</p> <p>5. 他の支援団体との連携 当 NPO の理事長が、ふうあいねっとの副代表を務めていることもあり、当 NPO の活動から把握したことを、定期的な会議やメーリングリスト等を通じて、ふうあいねっと、茨城県、福島県（福島県、福島県教育委員会、福島県内各町の復興支援員）などに積極的に共有することで、効果的に連携をした支援に繋げることができた。また、各地での各団体の動きや課題を把握することで、茨城県内外の動きを俯瞰的に分析しながら支援に繋げることができた。 一方で、他団体の活動を訪問し意見交換するなど、ネットワーク構築に繋がる動きは急遽補助対象から外れてしまったため、これまでのように積極的に他団体と関わる頻度は随分と減ってしまったことは否めない。</p> <p>6. メディアとの連携による情報発信 これまでのように、各メディアと情報交換をしながら活動を進めて行くことで、当 NPO の活動のみならず、把握しにくくなっている避難者の課題について、情報発信をすることができた。</p>
<p>今後の目標</p>	<p>茨城大学が 2019 年 3 月に発表した避難者アンケート調査によると、心身の不調を訴える家族がいる、地域に相談できる相手がいない、など、8 年経っても、原発事故の傷跡が残ったまま、避難先で地域との良い繋がりを持っていない避難者が相当数いる事がうかがえる。そこで、今後も、以下の点により力点を置きながら活動を行っていく。</p> <p>1. 避難者に寄り添ったパーソナルケアの継続 心身の不調、地域からの孤立、人間・社会不信など、表面的には見えにくい課題を抱えている避難者が多いことから、継続して訪問活動を通して寄り添うことで、表面化しにくい避難者の声を丁寧に拾い上げ、各支援団体、地域リーダー、専門機関などに共有し、セーフティネットに繋げていく。節目を迎える震災後 9 年目、10 年目にこれまでの訪問メンバーに加えて、学生支援団体にも協力してもらいながら、集中して訪問活動を行う。</p> <p>2. 避難されている当事者が主体となった交流会の開催 交流会開催に当たっては、継続して、避難者や帰還者に協力して頂くことで、当事者が主体となった活動を行っていく。特に企画、広報、当日運営の面で、連携を行う。</p> <p>3. 茨城の魅力を共有する交流会の実施 昨年度から、避難先である茨城県内の地域のまち歩きや、果物狩りなど美味しい食べ物を通して、茨城県の魅力を共有する交流会にスタイルを変えている。結果、盛況であり、色々なところに行きたいとの声もあるため、このスタイルを継続するとともに、茨城県南のみならず、これまで交流会の開催が少なかった鹿行地域での開催も増やす。</p> <p>4. つくば市・つくば市教育委員会、福島県・福島県教育委員会、福島県内各町の復興支援員等との連携強化 既につくば市内や茨城県南で活動を行なっているつくば市避難者支援部署・つくば市教育委員会、茨城県内で活動を行っている福島県・福島県教育委員会や福島県内各町復興支援員、避難者自助グループと、密に情報共有をしながら、効果的な活動を進</p>

	<p>めていくことで、更なる地域でのセーフティネット作りを構築していく。</p> <p>5. ふうあいねっとや他県の支援ネットワークとの連携 本 NPO だけではどうしても手におえなかったり、行き詰ってしまう事があるため、ふうあいねっとや他県の支援ネットワークとの情報交換などにより、俯瞰的に活動をふりかえり、より効果的な活動を行っていく。</p> <p>6. メディアとの連携、ホームページ等を通した情報発信 これまでのように、メディアとの連携、また、ホームページを通した情報発信により、状況が大きく変化していく中で、問題が風化しつつある避難者の課題について、広く取組を紹介していく。 特に、2年後には10年の節目を迎えるに当たり、メディアの動きもより活発になってくることが予想されるため、早め早めの寄り添った取材対応を心掛けていきたい。</p>
--	--